

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	「祈りとしての哲学」：論説
Author(s)	宮地，哲夫
Citation	龍南， 2 5 2： 3 2 - 3 8
Issue date	1942-12-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8521
Right	

「祈りとしての哲學」

文二ノ一

宮 地 哲 夫

(一)

齡未だ少壯にして、僭越の言説を恣にするを許して貰ひ度い。其れは何も、贅言を自ら撰擇して、人を幻惑するものでなく、又はプロタゴラスの所謂、尺度となつて、自らの言説に責任を有せぬとするのでもない。自分の言説は自分の言説として、何處までも責任があり、又それは、徹底に自己を見極めんとする欲求の純意識的に溢れ出す溪流の如きものである。唯だ、其の溪流の源泉に激む、麗艷なる明媚の風光を有するイデアの世界も知らず、將又其の遂に流れ果つべき究極の悟りをも知らぬ自分の悩みとして、僅に時々刻々に下降する此の溪流に乗つて河岸に咲く眞理の花に暗中摸索するのみである。時ありてか澎湃たる激流に面接しては、ヘラクライトスも宜なる哉と首肯され、又は煙波渺茫、風波寂とし揺るがざる激みに差掛りては、これぞイデアの曙光なりと、瞬時の喜悅を貪る事もあつた。然し溪流は何處までも溪流であてり、水は低きに流れて行く。河岸に咲く眞理の花も、自ら手を觸れて摘むに非ずして、僅に皮想的外面の觀覽のみに淺薄な喜悅と幻滅とを交代せしめて居たに過ぎなかつた。其れでも溪流は順當に流れて行つた。然して、數々の眞理と、その花の色彩の多樣性に、之れ應接追なき間に、此の溪流に乗つた小舟は、どうやら河口を離れて、洋々たる青溟き海原に出たやうである。大海の一粟たる、此の脆弱なる小舟も、唯だ、始めて自己の生に目醒めた、生命的自分を便乗せしめてゐると云ふ、我儘勝手な論理の形式に於て生き抜く限り、自らの哲學を求めて彷徨せねばならないのである。

此の危険なる小舟に便乗する現在も、決して孤立的現在として存在するものではなかつた。

未だ自らの生を自覺せずして、唯だ天賦の器官にて、呼吸して居たに過ぎない過去ではあつたが、全溪を過りての數々の想ひ出は野に遊び、溪谷を下り、野の花を愛でて、悅樂と戰慄とを、夢から夢へと時間の紐に操られてゐただけに、此

の小舟の現在、其れ等の幾多の過去の現在を隨伴しつゝ、即ち、その過去の現在を内に含んだまゝに渺邈たる海洋に出て行つた處なのである。

此處に、既にして過去と云ふ現在の制約と規定の連鎖があつた。最早、自分は此の自覺に於て、孤立の現在を享樂する事は不可能である。然して此の現在を凝視すれば、する程、益々ゴルジャの鐵鎖は、判然と意識の上に舞ひ昇つて来る。

又、一刀に切り捨てゝる氣概があつても、其れは秩序を無視して、自ら海洋に身を投ずるの猪勇に異ならない。斯る現在の制約と規定こそ、激浪風波を豫想して、現在に安堵し得ぬ懊惱であり、又、順當に溪流を下降したと云ふ過去の自覺こそ、此の未知の世界に在りて、何處に舳先を向けるべきかの、未來に拘束された現在の不安である。然して、此の懊惱を懊惱とし、又、此の不安を不安として、自ら其れ等に抗して、雄々しく、自覺の生命の姿を開展せんとする欲求の源泉は、彼の昔日のイデヤの世界を戀ひ慕ふもの、即ち哲學する心に外ならない。

此の自覺の現在に於ては嘗つて河岸に咲いた花にも、既に用はなくなつた。即ち、眞理とは、彼の色彩の多様な外的存在ではなかつた。凡ゆる過去の無自覺から脱却して、冷酷なる現在の自覺と共に流れ出た、此の渺茫たる未知の海洋こそ、實に自ら探究せんとする、哲學の眞理たる事に間違ひはなからう。こゝに於て、自覺の生命の峻嚴なる論理を操り此の廣漠たる眞理の海洋を彷徨して、自らの哲學的体系の軌道に乗らねばならぬ。暗々たる未知の世界にも眞理の曙光は燦然と輝いてゐる。唯だ願はくば風波の荒れざらん事のみであり、眞理の燈火を探究するに一刻も早からん事のみである。然して頼りなき未知の世界に眞理を探究しつゝ此の自覺の生命を乗り出して、生き抜かんとする敬虔なるものこそ實に祈りの心であり祈りとしての哲學に外ならない。

(二)

自分が此處に云ふ祈りと云ふのは所謂祈願と云ふ意味ではない。勿論自分の云ふ祈りの中にも、又、祈願的成分の幾分加味せられて居る事は事實であるが、祈願が純肯定的な大乘の精神であるに反し、祈りは小乗から大乘へ、否定からそれを否定した肯定へとの過程を履む、更に深淵にして、敬虔な、純直觀的内面性を保有するものである。無論祈りとしての哲學が、此の眞理の海洋を彷徨する小舟の目的港でない事は當然である。唯だ祈りとしての哲學は、自らの体系の軌道に

乗つて航行する間中、水先案内として常に必要なる精神であり、又、冷哲なる自覺的生命に隨伴する必然的要求なのである。然して、それは又、他日目的に入港せんとする小舟に對して、最後の音曲を奏し、恬悅としての伴奏の役目をもなすであらう。

斯る意味に於ける祈りは、全く純粹直觀的なものである。即ち、純粹經驗であり、具體的思惟なのである。直觀が眞に直觀であるために、直觀がそれ自らを直觀する如く、赤が赤であると云ふ事が赤であると云ふやうな、其の意味と存在の未分的な體驗なのである。然して、直觀が直觀であると云ふ連鎖の中には、一つの中心點がなければならぬ。然もその中心點は目的でも對照でもない、即ち直觀そのものである。斯る直觀そのものを中心點とする純粹直觀は、持續的である。故に又、常に現在的であらねばならぬ。何故なら、直觀の經驗に於ける純粹持續は、常に現在に於て、凡てが一如化されたる純粹經驗だからである。斯る意味に於て祈りは常に祈り自らを中心點として現在に於て持續する純粹直觀の體驗である。眞の直觀なるものは既に相互貫通的に多樣を統一したものである如く、眞の祈りは種々の相互並列直觀の多樣性を相互貫通的に統一した體驗である。即ちベルグソンの所謂純粹持續に於ける如く、祈りに依つて過去と未來を見るのでなくて、その祈りそのものに於て、蘇生した過去と未來とを現在化する純粹經驗だと思ふのである。斯くして祈りが現在のである以上、必然的にそれは活動的であり、積極的である。然して精神の動的活動は常に内面性に於て胚胎した生命の溢出に依存するものであり、こゝに眞の祈りは實に又、純粹内面的なものであらねばならぬ。

以上の如く祈りは實に純粹直觀的内面性の體驗であつて、外面的な相互並列の關係に於ては絶対に現はれ得ない魂の底に潜む敬虔な體驗である。其れ故に又、内面的良心の絶對的要求であり、胸の奥底に深く潜んだ魂の絶叫であるとも云へる。ニイチエの思想の如き、如何なる抽象の高さも、彼に於ては、まぎ／＼と其の身に抵觸する感覺であつたと云ふ如き實在こそ實に一轉回すれば、則ち、直に祈りの心に變移し得る處の、同一レベルに位置するものではなからうか。右に述べた如き眞の祈りの心が常に懺悔を隨伴すると云ふ事は、論を俟つまでもない事實である。祈りと懺悔とは、兩者が相互にそのものであり切る處に一如化する相即不離の一体である。自分には純粹の祈りとして、それを懺悔より分離抽象して考へる事は不可能である。兩者の何れか一を排除すれば、則ち他も他そのものでなくなり、全体は解消して、外面に浮遊する。こゝに祈りと懺悔とは常に因果の相即關係を以て、必然的に自らを顯現して來るものである。然して又、過去の制約

規定に依る懊惱と未來への不安とを一手に脊負つた此の現在に於て、不安を不安と考へる處に既に未知の光明を前提として憧憬して居たに違ひない自己の發展の余地としての未來が完全に此の現在から遮斷されたと峻嚴に自覺する時、吾々は一瞬にして觀念的未來への足掛を喪失して現在に含まれたる幾多の暗然たる過去の現在の中に陥落する。然して此の自覺が峻酷なればなる程、愈々吾々は此の暗然たる完結した行き詰まりの過去の現在そのものの中で呻吟し狂氣するのである。こゝに始めて此の過去の現在の中に陥落した生命的自己に對して、未來を遮斷された峻酷な現實の自己は、どうしても懺悔せざるを得ないのである。何故ならば、生命的統一としての自己が過去の現在と現實とに其の生命と肉体とを分離して存在する事は許されない事だからである。故に現實の自己は懺悔を契機として、此の過去の現在に陥落した自己の生命を取り戻さねばならない。こゝに外面の理解を超越した内面の寛大な豊富さと、自由無限なる活力とがある。然してこの現實の自己が完全に未來から遮斷されて、過去の現在の闇中に陥落した生命の奪還へと向ふ内面的敬虔な心こそ、即ち自然に溢れ出す熱涙の如く、魂の底からの叫びとしての泌々とした清淨な訴へに似た祈りの心に外ならない。

意欲的魂が自ら其の堰を切斷し、生命的に突發して溢れ出でんとする、懺悔への契機としての即ち懺悔への純粹前提としての祈りである。自分はこれを懺悔以前の祈りと名付けて置く。然して祈りの純粹持續性により、現實の自己が遂に、過去の現在の生命に自ら低觸して、一如となり、生命そのものに成り切つて蘇生した處に、翻身一回した悟りとしての祈りを體驗する。即ち、懺悔を経過して、回轉した、純粹反射的な祈りである。此の祈りこそ實にそのものになり切つた處の何等内外の拘束なき、蘇生した生命の活力であつて、此の祈りの中に於て、遮斷された暗然たる未來を否定した、新らしき生面の未來の輝きを見出す事が出来るのである。此れは懺悔以後の祈りである。故に眞の懺悔は論理的に見て、この二つの祈りの中間に位置せねばならぬ、此の懺悔以前と以後との二つの祈りは前者の敬虔にして清淨な訴へとしての祈りが後者の翻身一回實にそのものになり切つて蘇生した、悟りとしての祈りに變化したと云ふ、懺悔を媒介とした、論理的聯關を有するものではあるが、實際に於て、此の二者の間には、時間的又は、空間的なギャップは全然認容する事の出来ないものである。即ち、この純粹持續的閃きと閃きとの中間に懺悔は論理的的位置を占めるのである。即ち眞の祈りはこの論理的因果の聯關性を閃きとしての時間の中に、純粹持續的に現はすものである。二つの祈りは、論理的因果の聯關に於て、眞實に自らを現成し得るものではあるが、時間的又は空間的間隙を挿む余地のない、純粹持續の體驗である事は

それが純粹であればある程、實在的なものであればある程必然であらねばならぬ。然して論理的に懺悔以前の祈りは自ら
が眞實にそれに徹する事に依つて、眞に懺悔以後の祈りに論理的な翻身をなす事が出来る。實にこの二つの祈りは、相互
に表裏的であり、一如の祈りなのである。

此處に、遮斷された未來を否定し、過去の現在になり切つて蘇生した翻身一回の新生面の眞實現在の世界に發展する事
が出来るのである。諦觀より達觀へ、否定より、それを否定した肯定へ、懊惱から冷明な悦樂へ、そして不安から嚴肅な
希望へと、實に人生を清淨化し、發展せしむるものは、此の一如の祈りの心に外ならない。全ての破壊を建設に、凡ゆる
渾沌を統一へと導入するのは、實にこの眞の祈りに觸發されてゐる。哲學が眞の哲學たるためには其れが内より憤を發
して溢出したものでなければならず、情緒が眞の藝術的情緒たるためには、内より溢出した情緒でなければならぬ。如く
この祈りは實に内より溢出した愛の要求としての魂でなければならぬ。この祈り以前の自己が未來に遮斷された過去の現
在に懊惱し、超越を超越として見るその自己との間隔の大きさに、自らの不可超越性を歎き、そして自己一身の狹隘なる
過去の現在の拘束と抑壓とに圍繞されて呻吟してゐた際に於て翻然として魂の眞實からこの祈りに觸發されれば、吾々は
忽然として、自己否定即己肯定としての、自己一身の個人的觀念から世界的觀念へと自らを止揚超越せしめる事が出来る
即ち、個人的な懊惱、拘束及び抑壓を世界的なそれへと自らを止揚するのは實に以てこの祈りの活力に依存する。狹隘な
る個人的絶對困難を寛達な世界的それへと自らを止揚するこの祈りに於て吾々は忽然として、個人的自己を脱却し、超越
して個人的自己であると共に世界的自己になり切る事が出来る。然して内面に於ける、この個人より世界への解脱と超越
の中に、吾々は眞の自由と輝かしき未來との再現を把握するのである。祈りが凡ゆる過去現在そのものに透徹して、それ
を否定し、然して、翻身一回忽然として自由と未來の光輝とを掴み得るのも、實にこの個人より世界への止揚と超越性に
よるものである。然もそれは單なる止揚でも超越でもなく、胸の奥底深く潜む魂による絶對愛の必然的要求に基準するも
のであつて、即ち個人的生命の絶對愛が世界的それへと超越する事である。換言すれば、自己一身を救済する祈りの個人
的絶對愛が祈り自身の超越性に觸發されて、個人の外殼を突發し、世界人類の救済と云ふ世界的絶對愛に止揚擴大される
のである。ここに、祈りは個人と世界と又は、人と神とを結ぶ、内面的絶對普遍的愛の唯一の紐帶であり、媒介であり、
契機であると云ふ事が出来るのである。

(三)

斯く述べて來た自分はキリスト教信者でもなく、又、佛教信者でもない。又、それらに就て何等研究した覚えのない者である。然るに過去に於て無自覺に生命的人生の織機を織つて居た自分は、翻然とその織り出される模様の尋常ならぬを自覺した。嘗つて自分が幻惑された織機の経緯に分散する色彩には、眞理の影さへなかつた。此の生命的人生の織機全体を普遍的絶對愛に於て自覺する處に眞實の眞理は存在する。然して、織機の色彩に幻惑された虚偽の過去が多ければ多いだけ、益々其の感念は嚴格に收斂されて、峻酷に現在を行き詰らせ、暗然と未來を遮斷してしまつた。そして冷酷な自覺が愈々鞏固に緊張するに伴ひ自分の生命は、遂に、この過去の現在の闇中に陷落してしまつたのである。然も自分は渺邈たる波浪の海潮を乗り切る、又、無限に創造の織機を織つて行く、そして又廣漠たる沙漠の中を旅するのである。實にこの不思議の人生に於て、自分は愈々此の超理解的不可思議境に遁入つて行つた。そして此の不可思議境には、無理解でなく、理解を超越した眞理の燈火が燦然と輝いてゐる様に思へるのである。故に自分には、此の絶對的制約の現在から逸脱して、過去の無自覺な夢から醒めた臉を更に擦すり、よく此の不可思議境の眞理の燈火を見極めるには、どうしても、此の眞實の祈りが魂の絶對的要求として必要であつた。そして又、それは必然的に泌々と溢れ出たのである。實に此の祈りは廣漠な沙漠を渡る旅人が、オアシスに臨み得た如く、常に過去の現在の生命に徹して、否定し、現在から未來へ、諦觀から達觀へ、懊惱より冷明な悅樂へ、そして不安より嚴肅な希望へと、人生を淨化し意義付けて、發展せしめてゐるのである。

悟り、そのものは何處まで行つても悟りであり、悟りそのものは、絶對に個人の埒外に波及する事は出来ない。悟りそのものに於ては、個人的な内面的積極性は認め得られるも、個人の埒外に於ては、その積極性も零である。悟りは即ち常に再歸的に自己への還元を必要とする。そこに於て、始めて悟りとしての世界的絶對愛の普遍性を外面に積極的に傳へ、そして救済する事が出来るのである。然るに、祈りは、純粹持續的直觀である故に、悟りをも包含し、そして懺悔以前以後の二者一如の眞の祈りは個人より世界への止揚超越としての祈りその儘に於て、自己一身の救済と共に、世界的各個人の救済に變移する絶對的普遍愛を保有するものである。即ち、個人的と同時に世界的適合性に於ても、常に積極的魂の能動を本然的に

有してゐる。然して、此の生き抜かんとする人生に、又、自覺的生命を乗り出した人生に於て祈りこそはこの人生の最終まで、時折々の生命的展開發展の契機として、吾々の人生を淨化し統一するのである。自分は宗教の何たるかを知らない。故に自分の所謂、祈りは特殊的宗教の限定制約を絶した、自己一身の生命的なものである。唯だ人間として在り、そして國家の中に生きる、この自分の意味と存在の中に、目らの哲學を、自ら探究して行く冷哲な自覺的意志に於て、より強き生命の發展とより清き人生の淨化を致し、そしてより深くこの人生を見極めんとする、自覺的魂の叫びの中に絶對必然的に自然に溢れ出づる祈りなのである。

然し、これも一種の獨斷的主張に過ぎない。(昭十七、十二、一)

附記 これは本年四月母を失つて經驗した、眞實の祈りを体系化した一種の獨斷的試論に過ぎない。